学 会 名

第3回国際化粧品療法医学会
2022年10月21日(オンデマンド配信 2022年10月28日～11月28日)

研究テーマ

うつ症状を呈した女性患者に対する化粧品を活用した作業療法
回復期リハビリテーション病棟での取り組み

病 院 名

医療法人社団健育会 湘南慶育病院

演 者

鈴木ともみ(OT) 山岡洸(OT) 丸山祥(OT) 石橋仁美(OT東京工科大学)

概 要

【はじめに】

今回、回復期リハビリテーション病棟においてうつ症状を呈した事例に対し、化粧品を活用した作業療法を実施した結果、気分や活動性による変化を認めたため以下に報告する。なお、本報告に際して口頭で同意を得た。

【方法】

70歳代女性、右脳出血を呈し、身体機能は問題ないが、自発的な活動はなくベッド上で過ごし、ADLは要介助だった(FIM:53/126点、MMSE:23点)。また、「死んでも良い」等の発言があり、他者との交流を避けていた。家族に迷惑をかけることを心配し自宅退院に対して否定的であった。気分プロフィール検査(以下、POMS)では抑うつ気分を示し、人間作業モデルスクリーニング(以下、MOHOST)では運動技能以外の項目はすべて低値であった。そこで、通常の作業療法に、04事例の以前の習慣であった化粧品を活用したプログラムを追加した(週2-3回、4週間)。

【結果】

朝の整容などの日課を計画的に行い、自ら他者に挨拶をするなどの変化が見られた。表情は明るくなり、POMSでは抑うつと無気力、活力の項目で改善を認めた。MOHOSTは作業のパターンと環境が向上し、ADLや認知機能にもよい変化が波及し(FIM:112/126点、MMSE:30点)、無事に自宅復帰できた。

【考察】

今回、作業療法に化粧品を活用した結果、気分の改善や活動性が向上し、自宅復帰につながることができた。この理由として、元々の習慣であった化粧品を通して事例の自信が回復したことが考えられる。